「――ここ、クリトリスって言うんだよ、分かる？　勃起してるね。ぷっくり、パンパンになってる」
「っ、くりと、りす……っ？♡　はあっ♡そこっ♡さわったらなんかぁぁっっっ♡♡♡」
「はは。いっぱいえっちな声出ちゃった。……なんか、どうなるの？」
「ッわかんなっ♡だってこんなっっ、はじめてっっ♡」
「そっか、分かんないか……。じゃ、もっと擦ってあげようね」
「っっひゃんっっ♡♡……～～っっなんかっ♡いっぱっっ、っきもち、い、のが、っっっ……～～あがってくるぅぅぅッッッ♡♡」

私の世界に、こんな快楽は無かった。
もっぱら〝快楽〟が指すものと言えば、美味しい食事をとってフワフワするとか、踊りあかして楽しくなるとか、肩を揉まれてリラックスするとか、そ

ういった秩序に守られた行為が殆どで。
自分を保てなくなったのは、初めてだった。
私はこの世界にやってきて初めて、異性に体を触られるという悦びを知った。そう、本当の快楽を知ってしまったのだった。

1.

地鳴りのような雄叫(おたけ)びが追いかけてくる。振り返れば、もうもうと舞い上がる砂ぼこり。オークの大群だ。
「くそっ、一対一万の軍勢じゃ分が悪すぎる。どこか逃げ込まないと……っ」

私はたった一騎で、岩山と岩山に囲まれた荒野を駆け抜けていた。
「ハイヤーッ」
このままではやられるのも時間の問題だった。踏みつぶされるか、めった刺しにされるかが関の山。私は馬を鞭打ちつつ、どこか身を隠せる場所が無いか必死に右に左に視線を巡らせた。
「しめたっ、あそこに洞窟がある！」
と、左前方の小さな岩影の向こうに、人が入れそうな穴が見えた。この辺りの洞窟は地下世界に通じるものも多い。もしドワーフの村に匿ってもらえれば、逃げ切れるかもしれない。
絶望的なこの状況では、一縷の望みがあるだけありがたかった。私は手綱を握り、重心を左に傾けて馬を誘導した。
「お前はここでお逃げっ」
洞窟が目前に迫ると、馬を飛び降りた。自由を得た馬は、まるで鹿のように

崖を駆け上っていく。私は愛馬の無事を祈りつつ、自身は洞窟へと駆け込んだ。

「――絶対にオークには捕まらないっ、捕まりなんか、するものか――！」

ハッハッと息を乱しながら、必死に先へ先へと進んでいく。

枯れ枝を拾い、軍服の裾の布を破って巻き付け、マッチで火をともした。

人一人がやっと通れそうなほどの狭いトンネルだった。ずっと後ろの方で、オークの雄叫びが響いている。やはりここまで追ってきているのだ。しかし、今は前に進むことだけ考えた。

やがて奥の方に仄かな明かりが見えた。

「ドワーフの村だ！」

私にとってその明かりは希望そのものだった。思わず松明を放り出し、私は全速力で駆けだした。

「――あ？　あれ？」

しかし行けども行けども、村らしきものには辿り着かなかった。
寧ろ、明かりは移動しているようだった。私が奥に進むほど、奥に引っ込んでいって――。
「人なのか？」
村の明かりではなく、もしかして誰かが松明を持って移動しているのだろうか。
そう思いかけたとき、急にその明かりは目が眩む程に輝いた。そして、まるで爆発したかのように一気に私のいるところまで増長し、私の全身を包んだのだった。
「なにっ？　なんだこれはっ？」
辺り一面、真っ白に光り、髪は衝撃で逆立つ。
何が起きたのか？　ここはドワーフの村じゃなかったのか？　まさか竜が火でも吹いたというのか？

けれど事実を確認しようにも――とにかく眩しくて何も見えない。

△

「……うう……」

それから、どれぐらいの時が経っただろうか。

いつの間にか光は収まっていて、私は目を開けられるようになった。

「ここは……どこだ……？」

けれど、全く馴染みのない光景を目にして、呆然と立ち尽くした。

「確か、洞窟にいたはずだが……？」

それは、部屋だった。

私の知っている部屋とは全く趣きの違う部屋だったけれど、壁と天井で囲まれている以上、とにかく〝部屋〟と呼ぶしかなかった。

その部屋の真ん中で、男性が一人、座っていた。

目をまん丸にして、こちらを見上げていた。髪はくせ毛が無造作に伸びていて、顔はよく見えない。上は白い薄手の布一枚、下は黒いズボンという、粗末ないでたちだった。

手に小さな薄い箱のようなものを持っていた。

「おい……ここはどこだ？　貴様は誰だ？」

「えっ、それ、そっちが言っちゃうわけ？」

「？　どういう意味だ？」

「……不法侵入してきたのはそっちですけど……」

男性がおそるおそる、一点を指さす。私はその時ようやく、背後に大きな穴が開いていることに気付いた。

「なっ、これ、まさか私がっ？」
「いや、君がやったかは知らないけど。……いきなりすごい音がしたと思ったら、そこの壁に穴が開いてて……、君が立ってたから……」
男性は困惑した様子ながらも、優しそうな声で説明してくれた。おそらく訳が分からない状態なのはお互い様だと思うのだけれど、かと言ってがなり立てたりしないので、それだけでも彼が悪い人間ではないと推測できる。
「それが本当なら、大変なことじゃないかっ。私は他人の家の壁に穴を開けたかもしれないのかっ……。ああ、しかし洞窟を走ってただけなのにどうして……っ」
「洞窟？」
「ああ。オークに追いかけられてて……ドワーフの村に逃げ込もうと思っていた……」
「あはは。君、面白いこと言うねえ。……なんか、異世界からやってきた人っ

て感じじゃん」
　男性が力なく笑う。
「異世界？　しかし、言われてみれば別の世界に来たような気分だ。見慣れないものばかりだし」
「そ、そう？」
「ああ、例えばそれは何だ？」
　私は男性の持っていた小さな箱を指さした。
「これは任○堂のスイ○チだけど……やってみる？」
　男性が〝ニンテンドーノスイッチ〟なるものを見せてくれる。その小さな箱の中では絵が動いていて、私は腰を抜かすほど驚いた。
「なんだこれはっ、すごいっ！　魔法かッ？　いったいどうなってるんだ？」
　思わずその箱を手に取り、天高く掲げてみたり、裏返して、しげしげと観察したりした。

「あは……あはは……」
男性は、やはり何故か力なく笑っていた。

△

男性――彼はカナタという名なのだそうだ――によると、やはり私は何らかの理由で異世界に飛ばされて来てしまったのではないかということだった。
決定的な理由として、なんと、カナタのいるこの世界には、オークもドワーフも魔王も存在しないとのことだった。この世界ではそれらは全て空想上の生き物として位置づけられていると。
「だから、君の世界と僕の世界は全く違う次元の世界なのだろう」

と、カナタは言った。
ちなみに、私みたいな女剣士も存在しないのだそう。
「じゃあ、平和な世界なのだな！」と目を輝かせたら、けれどカナタは「それは、どうかな」と微妙な顔をしていた。どうやら、人間同士の争いはあるらしい。
「悪い王がいるなら、私がこの剣でたたっ切ってやる！」
私がそう息巻いたら、
「言いづらいけど、この世界では剣は時代遅れな武器だから通用しないよ」と一刀両断されてしまった。
カナタ曰く、「大勢の人間を一瞬で確実にせん滅する技術が存在する」とのこと。
「百人、千人どころじゃないんだよ。下手すると数百万人が一瞬で死ぬ」と真顔で言われ、それまで魔王とオークより怖いものはないと思っていた私も、

さすがに「人間の技術」というものに身震いしたのだった。

その後は、いったん玄関で靴を脱いで（この国は部屋では靴を脱ぐ習慣があるらしい）、二人で壁の穴をふさぐ作業に取り掛かった。

カナタが〝ダンボール〟なるものを持ってきたので、とりあえずそれを何枚も重ねることにする。カナタは立ち上がると私よりも頭一つ分背が高く、すらっとした印象を受けた。

「――あのさ、君のこと、なんて呼べばいい？」

カナタの柔らかな声が頭上から降ってくる。

「ん、私の名前か？」

私が〝ダンボール〟を押さえている間に、カナタが〝ガムテープ〟なるものを周囲を固定する。

「私のことは気軽に、『ぼニゃ○▲ひンにャづ×■ォん』って、呼んでくれ。

春に咲き乱れる花々という意味だ」
「……ちょっと、厳しいかな。意味は素敵だけどさ……」
カナタが言うには、私の名前はこの世界では発音が厳しいとのことだった。
「……では、どうすれば……」
せっかくの自慢の名なのに、しょんぼりしてしまう。
「あのさ、ピンクちゃんってのはどう？　君、すごく綺麗なピンク色の髪をしてるし。名前の由来を聞いたら、益々ピンクちゃんがぴったりだなって」
「ピンク……私の髪の色……素敵だな！　分かった。そうしよう！」
そうやって私の名前問題は解決した。

夜は、カナタが食事を作ってくれた。カレーライスという料理だ。甘辛くて美味しかった。
ただ、あまり使いこまれた様子のない広いダイニングには違和感を覚えた。

家族や従者はいないのかと尋ねたら、「三年前にみな事故で亡くなっちゃった」とのことだった。
「それは……辛かったな。だが、奇遇なことに私も孤児だ。だから、カナタと一緒だ」
「そっか、ピンクちゃんもなんだね。でも、ピンクちゃんは偉いよ。向こうの世界では剣士をしてたんだろ？　……僕と違って、ピンクちゃんは自立してる」
カナタがマグカップを持って、俯く。
私は、黙々とカレーライスを口に運んだ。やはりこのカレーライスなる料理は、甘辛くてとっても美味しい。次は、作り方を教えてもらおう。
「カナタは、何をしてる人なんだ？」
「……僕は、それ以来ずっと引きニートしてる。……まあ元々引き込もり体質ではあったんだけど」

「ヒキ・ニートというのは？」
「あはは。まあ、ダメな大人の呼び名みたいなもんかな。つまり仕事してないってこと！」
カナタは、わざと明るく振舞った。
「……お金は、どうしてるんだ？　この世界に通貨はないのか？」
「もちろん、通貨の概念はあるよ。親の生命保険が下りたし、それを投資に回したらけっこう儲けちゃってー……って、こんなとこまではピンクちゃんには分かんないよね。ま、ざっくり言えば、お金が勝手に入ってくる仕組みになってるってこと！」
「へえ、勝手に入ってくるなら別に仕事しなくたっていいじゃないか。私だって、お金があるならすぐ仕事やめるぞ」
何故か、カナタの肩を持つような言葉が出てくる。
おまけに、「はぁ、労働なんて、いやだいやだ」という芝居じみたセリフま

で吐いてしまった。
「ははっ、ピンクちゃんって面白いね！」
そのとき、カナタが出会って初めて、本心からの笑みを浮かべた。私はその屈託のない笑顔に見惚れて、思わず匙を止めてしまったのだった。

△

「ピンクちゃんの世界にもお風呂はあるだろうけど、シャワーはないよね？使い方教えるからこっち来て」
「シャワー？　何だそれは」
カナタの後について浴室へ向かう。私の世界では主に公衆浴場を使う。個

人の家に浴室があるだけでも驚きだった。
引き戸を引くと、白いタイルが敷き詰められた小さな空間があった。
「えっとね、まずここのボタンを押して、ガスを点けます。そして、取っ手を握って、下に捻ります」
ジャーっと水が出始める。
「すごいっ」
「もうすぐお湯に変わるから、暖かくなったら、かぶってね」
風呂というからには裸にならねばならないだろうと、私はその場で身に着けていた甲冑やジャケットをぽいぽい脱ぎ捨てていった。
「ちょっ、何やってるの？！」
何故か、カナタが顔を真っ赤にして慌てだした。
「何って、お風呂に入るんだろう？　全裸にならなくては」
「いやっ、いくらなんでもそれはっ、うわああぁピンクちゃんおっぱいおっ

きいねっ……て、ちがっ、ごめっ、っっ〜〜僕っ、あっち行くからっっ！！」

そして、脱兎のごとく逃げ出していった。

一人残された私は、「はて？」と首を捻りつつも、やがて清潔な浴室と暖かいお湯の方に気を取られ、数条秒もすればもうすっかり今の出来事などどこへやら。

るんるん気分で湯あみを満喫したのだった。

△

お風呂から上がると、眠くなってしまった。

カナタが着替えを貸してくれた。肌触りのいい綿の上着とズボンだった。

ただし、カナタのサイズだから、ぶかぶかだ。
「……の……、ーぶら……ちくび……」
「え？　何か言ったか？」
「やっ、こっちの話！　ピンクちゃんは僕のベッド使っていいよ。僕は、居間のソファで寝るから」
「？　別々の部屋で眠ったら、敵の襲撃があったとき、カナタを守れないが」
「いやっ、敵の襲撃なんかないし、それ以前に……一緒の部屋では眠れないよ」
「？　なんでだ？」
「なんでって……！　そりゃだって、僕たち、そんな関係じゃないしっ……」
「そんな関係って、どんな関係だ？」
「いや、どんな関係って言われましてもっ……僕たち、男と女なんだから。分かるでしょっ？」

「？　分からない。……この世界では男と女は一緒の部屋では寝ないのか？」
カナタの顔がどんどん赤くなっていく。何故か、さっきから私の胸ばかり凝視している。
「～～～～っ、こっちの世界では男女は同じ部屋では寝ないのっ！　それが常識なのっ！　じゃ、僕はあっちで寝るからっ！　おやすみなさい！！」
そしてバタンとドアを閉めて部屋を出ていった。
「？　変な奴……」
さっきのお風呂のときと同様、私はカナタの奇行に首を傾げつつ、しかしフカフカの布団にくるまると秒で眠気が来てしまって、結局、あっという間に夢の世界へ旅立ってしまったのだった。

2.

「馬車が……勝手に動いてる……っ、それに、お城がこんなに沢山っ！　な、カナタの世界は王が何人もいるのか？！　こんなに人が多いのは、お祭りをしているからなのか？」

買い物へ行こうと誘われ、私とカナタは朝から「シブヤ」へ繰り出していた。

家を出て半刻ほどでたどり着いて以降、私は目にするもの全てに圧倒されていた。自動で動く馬車。いったいどこから現れたのかと感心するほどの大勢の人間。それに、天高くそびえる直方体の建築物。先ほどから上ばかり見上

げ続けているせいで、首が痛い。
「城じゃないよ、ビルだね。別に王族が住んでるわけじゃなくて、商人が借り上げて商売している場合が多いかな。それと、馬車に似ているあれが勝手に動くのは、ガソリンっていう液体燃料を内部で爆発させてそのエネルギーで車輪を回転させているからだよ。さっきも説明したけど、この世界は大抵のものがエネルギーで成り立っているんだ。石油、ガス、太陽……。あ、お祭り騒ぎに見えるけど、ここは毎日こんな調子だよ」
「へー、カナタは物知りなんだな」
剣士姿の私がそれほど人目を引かないのも「シブヤならでは」だと教えられた。他の地では不審者扱いされるだろうから、とにかく服を揃えよう、それが今朝からカナタが主張していることだった。
「ピンクちゃん、こっちこっち」
カナタに誘われるまま、イチマルキュウというビルに入る。

「エホンッ！　ま、ま、まずは、その、……し……下着……を買い揃えようね」
「ふむ。……下着……」
私の世界では、女剣士は基本、簡素なサラシとフンドシを身に着けるのだけれど、この世界の女性は皆、色とりどりのレースがあしらわれたまるで装飾品のような下着を身に着けるとのことだった。確かに店内は美しい色の小さな布で埋め尽くされていた。
「――……すみませーん」
カナタが店員に声をかける。
「あの、この女性に合う下着をいくつか見繕ってもらえませんか？　辺境の独特な文化の国で暮らしていたんで、ちょっと変わってる子なんですけど。で、でもいい子なんでっ。支払いはちゃんと僕が責任持ってしますから！」
カナタの顔はこれ以上なく赤かった。

「あは、もちろんですよお！　こちらへどうぞー」
私はやたらと声の高い女性店員の後に付いて試着室へと向かった。
「……この〝ブラジャア〟なるもの、サラシとはまた違った窮屈さがあるな……」
「あは、も～っ。ブラジャーをしていることで、お胸の形が綺麗に保たれるんですよぉ」
というわけで、現在、試着室で店員と二人きりである。私は白いレースの〝ブラジャー〟を装着している。
「別に、胸の形なんてどうでもいいのだが」
そう言うと、笑顔の店員に、何故かちょーんと背中を叩かれる。
「そんなそんなぁ～、もー、あんな優しそうな彼氏さんがいるのにぃー」
「？　彼氏？　彼氏って、カナタのことか？　カナタが優しいのと、私の胸

の形と、いったいなんの関係があるんだ？」
「えっ、ちょっとマジでウケんだけどー。私、お姉さん好きだわー♡」
もともとフランクではあったけれど、店員の口調が更に砕ける。
「マジデウケンダケド……とは……？」
終始、分からないことだらけだった。あまり会話が噛み合っていない気もしたけれど、しかし女性店員の方はと言えば、さして気にした様子もなく、次から次へと「こちらはどうですかー？」と笑顔で下着を持ち込み続け、結局、五着身に着けたところで私の方が疲れてしまい、「下着はもういい……」という白旗と共に買い物を終えることになった。
「ありがとうございましたぁー♪」
「――僕が持つよ」
カウンター越しに差し出された紙袋を、さり気なくカナタが横取りした。

「？　なんでだ？　私が使う下着なのに……」
「うふふふふー」
店員がなんだか意味深な笑みを浮かべている。
「あ、あっち行こっ」
そうして釈然としないまま、次の店にいくことになった。

「ピンクちゃん、よく似合ってるよ」
次の店ではワンピースやブラウス、スカートなどを物色した。下着を購入した時とは打って変わって、今度はカナタも店内に入ってきている。試着室のすぐ脇を陣取り、私がそこから出る度、「可愛いね」「よく似合うよ」と褒めてくれた。
（なぜだろう……カナタから褒められると、妙な気分になってくる……）
女剣士として生きてきた為、着飾る行為とは無縁だった。十五歳の成人の

儀式の時ですら、甲冑を身に纏っていた。だが、別にそれについて不満もなかった。単純に機能的な服装の方が、敵を斬りやすいから。

（スカートなんて戦う時には不利なのに……）

なのに、いま初めて、ヒラヒラした服を着ることに喜びを感じている。全く機能的でも合理的でもない服装を、自ら進んで身に着けている。何故かカナタの誉め言葉を聞いていると、こんな頼りない服を着るのも悪くないような気がしてくるのだ。

「あは。さすがピンクちゃん！　特にピンク色が似合うね。それ、すごく可愛いよ！」

「そ、そうか……？」

ピンク色のフレアスカートを特に褒められ、白いブラウスと共に「じゃあこれをくれ」と店員に渡す。その後も特にカナタの反応が良かった四、五着の服の購入を決めて、店を後にした。

「ふふ。そのワンピース、すごく似合ってるよ」
そう言いながらまたもやカナタが荷物を持とうとしてくれる。私は生まれて初めて花柄のワンピースを着ている。
「カナタ。半分こだ」
なので、半ば無理やり紙袋を一つ奪う。何から何までカナタ任せになってしまうのは嫌だった。
「あは。ピンクちゃんってほんと自立してるね」
カナタはふにゃあと笑っていた。前髪から見え隠れする目が、優しい光を宿している。
「当然のことだ。二つ荷物があって、二つ人間がいるのだから、平等に一つずつ持つのが道理だろ」
「そういう高潔なとこ、好きだよ」

「！」
好き、の言葉に、またもや初めての感情が湧いた。胸が締め付けられるような、それでいて嬉しいような――なんとも言えない感覚。
「そろそろお腹空いたよね。どっかお店入ってご飯食べようか」
「あ、ああ、確かに。そうしよう」
けれど、その正体をじっくり考える前に、昼食を取ることになってしまった。私たちは外に出て、飲食店が密集しているビルへ移動した。
「で、何食べようか？　ピンクちゃん、何食べたい？」
「む。初めて見るものばかりだ、どれもこれもうまそうだな。おお、あの店から出てきた女性、すごく腹が膨れているぞ！　すごい、あそこにしよう！」
全体的には細身なのに腹だけがやたら前に出た女性が幼子の手を引きながら満足した様子で一軒の店から出てきた。あそこまで満腹になるということは、よほど美味しかったのだろう。

「ピンクちゃんピンクちゃん、あれは妊婦さんだってば」
　そこで聞きなれない単語を聞かされる。
「ニンプ？」
「お腹に赤ちゃんがいるんだよ」
「……お腹に、赤ちゃん……？　いったいなんの為にそんなことを？　敵から隠すためか？　しかし、あんな狭いところに閉じ込めていたら赤ん坊が窒息するだろうが。そうだ、ここはあの女に一言物申すのが筋だ」
「えっ、ちょちょちょ、ちょっと待って」
　赤ん坊をそんなところに閉じ込めるなと言いに行こうとして、カナタに腕を掴まれ、制止された。
「閉じ込めるも何もっ、赤ちゃんは女の人のお腹ので育つんでしょ！」
「？　お腹の中で育つ？　何を言ってるんだ、子どもは神樹から授けられるものだろう。神に願ったら虹の向こうの神樹に実る。熟したらパカっと割れ

て中から赤ん坊が出てくるから、そうしたらコウノトリが夫婦のもとへと運ぶ」
「それはなんとも神聖……って、いやっ、今はそんな話をしてるんじゃなくて。こっちの世界じゃ、そうじゃないんだよっ」
カナタと口論していると、だんだん人が集まってきた。あの腹の膨れた女も含め、皆が皆、好奇の目で私たちを見ている。
「ピンクちゃんの常識からはだいぶ外れてるかもしれないけど、こっちの世界では、子どもは女性のお腹に授かるものなんだ」
「……なんだと……」
それは正に青天の霹靂だった。私は再度、例の女性の腹を見た。てっきり服の下に隠しているとばかり思ったが、カナタの口ぶりだとつまり赤ん坊は女性の体内に内包されているということになる。……木の実が生(な)るように、女性の腹に、人が生(な)る。そんな魔訶不識な現象が、今いる世界では起きているの

だ。
「……すごい」
気付けば、その三文字の感想が漏れていた。生命の誕生の仕組みが違うという大きなギャップに直面した私は、しかし、困惑するというより、強く好奇心を刺激されていた。
「……すごい。すごいすごいすごい……、すごいぞっ」
「へ？」
私は思わずカナタの手を掴んだ。
「カナタッ、私も子どもを作りたい！　お腹に赤ちゃんを宿してみたいっ！」
「えっ、あっ、え！」
たちまち、何故かカナタの顔が発火しそうなほど赤くなっていった。
「カナタ、私もこの腹で子どもを育てたい！　子どもが欲しいっ！　なあっ、子作りの方法を教えてくれっ！　特定の女性だけ腹が膨れているということ

は、何か宿すきっかけはあるのだろう？　どうすればいいんだ、やはり神に願えばいいのか？」
「いやっ、そ、それはここではちょっと……っ」
「なぜだ、ケチ！　作り方ぐらい教えてくれてもいいじゃないかっ」
言葉を濁すカナタがもどかしくて、両腕を掴んで揺すってしまう。
そんな私に連動するように、ざわ、ざわ、と人だかりが穏やかさを失っていく。
「なにあれー、やばくない？」「動画の撮影なんじゃない？」「男の人、顔真っ赤じゃん」「ぷぷ。赤ちゃんの作り方だって」
「――ピンクちゃん、とにかく場所変えようっ」
カナタが四方を見回しながら、私の手首を掴んだ。そのままずんずんエスカレーターの方へ私を引っ張っていく。

「カナタ。子作りの方法は教えてくれないのか？」
「教える、ちゃんと教えるよ。だから家に帰ろう」
カナタは相変わらず頬を染めていて、けれどなんだか怖い顔でもあった。何かを我慢しているような、でも、怒っているのとは違う、複雑な表情。
（……子どもの作り方でこんなに大騒ぎになるとは……変な世界だな。もしかして、宿すには大金が必要なのだろうか？）
このときまだ何も知らなかった私は、そんな呑気なことを考えていた。
まだ全く分かっていなかった。
子作りには、あんなことや、そんなことが伴うということを。
私はこの後ほどなく、めくるめく性の世界に少しずつ溺れていくことになる。

3.

「ピンクちゃん、ちょっとそこに正座」
「ん？　うむ」
　カナタの部屋。
〝オムライス〟なるものを〝テイクアウト〟して、帰宅してから二人で食べた。そうして腹が膨れて一息ついた後、向かい合って正座した。
「まずね、今後一切、男の人に『子作りの方法教えて』なんて言わないこと」
「なぜだ？」
「それはっ……えっと、ど、どう言えばいいかな。……簡潔に言うと、ピンク

ちゃんが危ない目に遭うかもしれないから」
「赤ん坊を作るのは、危険なのか？」
「危険っていうか、ああ、なんて言ったらいいかな、……男はオオカミなんだよ」
「？」
カナタが咳払いする。やはり、顔が赤い。
「ごめん、ちゃんと説明するね。……男の人の体内にある精子と、女の人の体内にある卵子という小さな細胞が、くっついて赤ちゃんの種になるんだ」
「ほう」
「で、だからその、……くっつけるためには精子を女の人の体の中に入れないといけないんだけど、でも、その方法が、なんて言えばいいかな……すごく、特殊で……」
「特殊」

「男の人の、お……おちんちんを……膣の中に入れるんだよ」
カナタの声が、これ以上なく上ずっていた。
「おちんちんを膣の中に？　入るわけがないだろ」
私は首を傾げた。
「……それが、どういうわけか入るんだな……人体の神秘っていうか……」
「すごいな！　ならば私も是非カナタとやってみたい！」
生憎、この時点ではまだ、私は子どもの落書きのような粗末なイメージしか出来ていなかった。陰茎を膣に挿入するという行為の特殊性をさっぱり理解していなかった。
「！　いやだからそれはっ」
感情がかなり昂ぶっているのか、カナタの目は潤んでいる。酒を飲んだように目元が赤くなっている。
「ダメなのか？」

「いやっ、ダメじゃないけどっ、僕はいいんだけどっ」
「なら、いいじゃないか。私もしてみたいぞ！」
俄然わくわくしてきた私は、正座をといて、膝歩きでカナタに詰め寄った。
カナタはと言えば、「んっ」「んっ」と変な声を出しながら顔をごしごし擦っている。
「ちょ、ちょっと待って……時間を……だって、まだ……」
「？　カナタは私のことが嫌いか？」
「……好きだよ。すごく。会ったばっかなのに、ピンクちゃんの純粋さや高潔さに惹かれてる。だから、だからこそ……その……」
「カナタ、私もカナタが好きだ……」
鼻が触れあうような距離で呟く。瞬間、ガッと肩を掴まれ、押し倒された。
「ピンクちゃん。ほんとにするよ。いい？」
さっき「男はオオカミ」という言葉出たけど、カナタの目は、本当に獲物を

前にしたオオカミのように燃え盛っていた。
真剣で、逃がすまいとしていて。少し思い詰めたようでもあって。……ああ、優しいカナタがこんな表情をするなんて。
私は面食らいつつ、けれど一方でドキドキもしていた。
「いい。何度も言ってるように私はカナタと子作りがした――んむっ」
言い終える前に、口を吸われた。何をするんだと言おうとして、入ってきたカナタの舌に邪魔をされる。
「むぅっ、ん、ん」
私の世界では、口と口を合わせる行為は溺れた人を蘇生させるときぐらいしかしない。何故こんなことをされるのか分からなくて、必死にカナタの肩をドンドン叩くが、しかしビクともしないどころか、更にちゅうっと舌を吸われる。こうなって初めて、実はカナタが存外逞しい男性だということを思い知らされた。

「！」
そうしている内にだんだん背中や腰がゾクゾクとしてきて、カナタの肩をドンドン叩いていた手はやがて重力に負けてしまう。
「ん、んぅ……」
私の眼前には、眉根を寄せ、目を閉じるカナタの顔があった。下向き気味の彼の睫毛は、思いのほか長い。至近距離で見ているせいで、呼吸や舌の動きと連動して微かに揺れているのが良く分かった。
（……この行為の意味は分からない……けれど、カナタがすごく真剣なのは分かる。背中がゾクゾクするのはそのせいだろうか……？）
そんなことを考えていると、不意にカナタの目が開いた。射貫かれるような眼差しに、またもやドキリとする。「もっとこうしていたい」という感情が沸き上がりかけたその瞬間、しかしカナタはお人好しの顔に戻って私から離れた。

「っわあぁッ、ピンクちゃん、ごめっ……！」
「ハア……っ」
　ようやく解放され、私は大きく息を吸った。安心半分、残念半分の、不思議な心境だった。
「僕は、なんてことを……っ」
「別に、謝らなくていいぞカナタ。いささか驚きはしたが、悪くはなかった」
「もうっ、またそうやって煽ること言う……！」
「？　何故怒る？　カナタは嫌だったのか？」
　もしかして、私を黙らせる為にカナタは今の行為をしたのだろうか。もしそうだったら、カナタに無理強いしてしまったということか。
「私はなんだか背中がゾクゾクした。もっとシてたいような気になった。だが、もしカナタが嫌々だったのだとしたら、もう言わない」
「嫌々なわけないだろ！　僕はピンクちゃんが好きなんだよ」

思い詰めた表情のカナタが覆いかぶさってきて、再び口を吸われる。
「むぅっ」
それと同時に、カナタの手が私の肩や腰、太腿を撫で始める。
「っ！」
その手の動きは、明らかに普通じゃなかった。母親が泣いた子をあやすときのものでも、筋肉のこりをほぐすときのものでもない。ゆっくりと、触れるか触れないかの絶妙な撫で加減で上下したかと思ったら、次の瞬間、強く円を描くように撫でられる。これがどういう行為なのか、未だ明確な言語化は難しかったが、とにかくカナタの強い感情を感じた。
「……っんぅ……！」
ただ、唇を塞がれているので、様々沸き上がる疑問のいずれも口にすることは出来なかった。
（変だ……力が入らない……それに、だんだん体が熱くなってくる……）

最後にちゅるんっと舌を吸われて、ようやく唇が解放される。
「はぁっ、――ナタっ……」
カナタは何も言わず、私の背に手を回して少し体を持ち上げると、ジジー、と背中のジッパーを下ろした。バナナの皮が剥けるように、肩からワンピースが脱げていく。買ったばかりのブラジャーが外気に触れ、私は自分の体が無防備になっていくこの状況に思わず生唾を飲み込んだ。
「……ピンクちゃんってやっぱ、胸、おっきいよね」
「？　胸が大きいと、問題が？」
「あるわけないよ。……ごめん、我慢できない。……触るね」
カナタがブラジャーの上から両の乳房を揉み始める。むに、むにん、と内側から外側にかけて。合間にブラの上から乳首の先端をコシコシ擦られたりもした。
「！　んっ……、どうし、て、そんなとこ……、っ」

触られているのは胸なのに、何故か、子宮が疼き始めた。特に乳首を擦られると下半身がムズムズする。
「っ、その声、……反則だって」
更にカナタが力強く胸を揉みしだき、かと思えば、爪先で乳首をカリカリと弾く。連動してもっと子宮は疼いて、膣からジュン、と何かが溢れてくるような感覚がした。
「んっ……、カナタ、変、だ……っ、カナタに触られると、なぜ、か、子宮がジンジン、する……っ」
「くそっ」
カナタは私の疑問には答えず、ブラジャーを下にずらすと、右の乳首にしゃぶりついた。と同時に、左の乳首は指でこすこすと弾く。
「？　っひゃっ……！」
右の乳首では、カナタの舌がチロチロと動き、左の乳首では、指の腹がこす

こすこすと上下に動く。
　優しく軽いタッチで、下から上にチロチロ……♡そして緩急をつけて、ぬるん、レロレロン……ッ♡♡　反対の指は、こすこすこすこすこす……♡これもまた優しく絶え間なく動く。
「っ、……なにっ？　〜〜っ、ぅ……、あ、……あっ……、ナタ……ッ！」
　それは本当に全く経験したことのない感覚だった。カナタから与えられる刺激に合わせて体がゾクゾク震えて、力が抜けていく。脳が蕩けるような感覚もあって、だから、〝気持ちいい〟と表現していいのだとは思う。初めて経験する〝気持ち良さ〟だから、そう分類していいか戸惑いはあったけれど。
　とにかく子宮がきゅんきゅんして、私は持て余した切なさをやり過ごす為、つい膝をこすり合わせてしまった。
「……なんっ、……う……、あ、……っ、私の体に、いったい何がっ、起きてっ……？！」

「子宮、今もまだジンジンしてる？」
カナタは相変わらず乳首を舐めながら言う。
「ずっとっ、してるっ……！　これは、なんなのだカナタっ、〜〜〜〜〜っ、どうして乳首を触られると、っ、んなっ、変になるんだっ？」
レロレロレロレロ♡こすこすこすこす♡
「っひぁ！」
「安心して。別に変になってるわけじゃないよ、ちゃんと気持ち良くなってるだけだから」
カナタの声が優しい。でも、その奥には強い情熱を感じる。
「っ、気持ちいいのは、たしかに、いいがっ、なんかっ、それだけじゃっ」
「え？　もしかして痛い？」
カナタが急に焦ったように私の顔を覗き込む。右の乳首への刺激が無くなった途端、物足りなさと寂しさを覚えた。

「痛くはないっ、なんかっ、そうじゃないんだ、そうじゃなくて……っ」
「痛くはなかったんだね、良かった……っ」
心底安心したようにカナタが息を吐く。
「ん、ん」
「じゃ、再開するよ？」
早くしてほしくてぶんぶん頷くと、カナタが笑う。
ちゅぷん♡
再び、右の乳首が舐められる。チロチロチロチロ……♡
既にぷっくり勃ちあがった乳首が、カナタの唾液に濡れ、舌に吸われる。
「んっ！」
私は待ち望んだ刺激に歓喜すると共に、やはりキュン、と子宮の疼きを覚えた。
「ふふ、うれしい？」

「あ……、やっぱ、おかしっ……、〜〜っ、カ……ナタに、そうされてるとっ……、っなんか、……――ぶんが、っ自分じゃないような、感じがするんだっ……！　どっかに飛んでいきそうなっ、それでいて溶けそうな、……からだが……、あつくてっ、息が乱れて、……ピリピリしてっ」

私はやっとの思いで自分に起きている異変を口にした。

「よしよし」

カナタは目を細めながら私の頭を撫でた。

「僕とピンクちゃんが今している行為はそういうものなんだよ。みんなそうなるんだよ。だから安心して？　自分が自分じゃないような感じがして当然なんだ。……だから、だから、とても大事な人としかしちゃいけないんだ」

「……大事な人……」

「そう」

「っカナタも、……自分が自分じゃないような、感じがしてる、のか？」

「……僕もしてる。ほら」
そう言って、カナタは私の手を掴み、彼の陰茎へと導いた。
「――！　すごい」
そこは、硬く、大きく、なっていた。ズボンの上からでも、はち切れんばかりに巨大化しているのが良く分かった。男性の性器のこのような変化を、私はこの時初めて知ったし、また目の当たりにした。
「これは、カナタにとっての、『自分が自分じゃなくなるような』こと、なのか？」
「そう、男の人はこうなってるとき、つまり勃起してるとき、理性と本能がせめぎあいをしてるんだ。よく覚えてて」
「勃起……私の子宮がジンジンしてるみたいに、カナタのおちんちんも、変な感じがしてる？」
「そうだね、興奮しすぎて、ムラムラズキズキしてるかな」

「……どうやったら落ち着くんだ？　私たちはずっとこのままなのか？」
「……うん……いっぱい触り合って満足したらいずれ落ち着く、けど……」
「じゃあ、触り合うしかないじゃないか！　決まりだな」
私はカナタの陰茎に再び手を伸ばし、布の上から先端を擦った。
「っ、ピンクちゃ……！」
カナタが息を呑む。腰は引けていた。私は意に介さず寧ろ彼に覆いかぶさるようにして、改めて勃起したペニスを撫でる。
「う、……やばいっ……それ」
「やばいというのは？　気持ちいいということか？」
「ん、気持ちいいけど、……でも、あんまされると、ほんと抑えがきかなくなりそうだから……っ」
「？　抑え？　何か我慢してるのか？」
「っ、酷いことしちゃいそうで怖いんだよ！」

「酷いこと？」
「い、言いたくない。僕のはやっぱりもういいからっ」
カナタは片手で私の手を制止し、もう片方の手で私の肩を掴んだ。
「？　もう終わるのか？　私はまだ満足していないぞ。子宮がまだ、じんじんしている」
「うん、分かってるから。ピンクちゃんのキリの良いとこまではちゃんと付き合うからっ」
「キリの良いとこ？」
「――こっち来て」
カナタは私の手首を掴むと、窓際のソファへと連れて行った。私だけがそこに座らされ、膝立ちになったカナタが私の正面を陣取る。
「僕がちゃんとイかせてあげる」
「？　イカセ……？」

「そのうち分かるよ」
まず、さっきのように乳房をゆっくりと揉まれた。円を描くように、優しく。
「ん……」
リラックスして体から力が抜ける。だんだん頭がぼんやりしてきたそのとき、カナタが、べ、と舌を出した。
れろん♡
今回舐められたのは左の乳首だった。右の乳首は、やはりさっきのように指でこすこす……と上下に優しく擦られる。
「あっ、これ好きっ……」
れろん♡ちゅるちゅるんっ♡……こすこすこすこす……♡こすこすこすこす……♡
「あ、あ、頭が蕩ける……っ、乳首舐められて触られると、子宮がきゅんきゅ

んするっ……、腰が、勝手に、動いてしまう……っ」
「ふふっ、ちゃんとどんな状態か言ってくれるの、すごくいいね。まだ続けるから、ピンクちゃん、どんな風に感じるかぜんぶ教えて？」
「う、あ、……っあぁ……！」
カナタの指も舌も、相変わらず優しい。チロチロ、レロレロ、こすこすこす……と一定のリズムで刺激を与え続けてくる。そんな触れ合いの中でたまにちゅううぅっと吸い上げられたり、乳首を陥没させるように真ん中をほじくられたりすると特に大きな声が出た。
「あっ、強く吸ったり、ほじったりしたらぁ……っ！！」
「強く吸ったり、ほじったりしたらどうなるの？　教えて？」
「あ、頭が蕩けるっ、それとっ、……なんか……っ、〜〜〜〜っ弾けそうに、なる……っ！」
カクン、カクン、と腰が勝手に突き上げるような動きをしてしまう。背は弓

なりに反って、尾てい骨の辺りに溜まったエネルギーが爆発しそうになる。
「子宮が、疼いてっ、すごく収縮しているっ……、触られてるわけでもないのに……っ！」
「ピンクちゃん、それはイきそうな証拠だよ、順調なんだよ」
「？　イキソウ？」
「そう、気持ちいいのがピークまで来たら、内側からこう、ビクビクビクうッて、爆発する感じがするんだ。全身に快楽物質が回って、頭が真っ白になって、凄まじい満足感がやってくるよ。そうなったら、ちゃんと『イク』って言って教えてね」
「ん、たしかに爆発しそうな感じがしてるっ、……来たら、『イク』って言って教えるっ、ちゃんと言う……っ！」
「ふふ、お利口さんだ」
　チロチロチロチロッッ……！♡

「っひゃんっ」
羽のように軽く、カナタの舌が左右に動く。緩急をつけられるのも気持ちいいが、一定のリズム、一定の摩擦で刺激を与えられ続けるのが一番『イク』感覚が強くなる。
「ずっとそうしてるとっ『イク』のが近づいてくるぅっ、……止め、ないで、ずっとチロチロこすこすされるのが一番……っ、子宮が、きゅうぅぅってするぅぅっ」
「なるほど、一定の間隔で続けるのが好きなんだね、しっかり覚えたよ。……にしても、最初から乳首だけでイケそうなの、すごいなあ」
「？　……どういう意味だ……？」
私は視線も定まらず、全身に汗をかき、腰をくねらせ、こんなにも前後不覚になっているというのに、さっきからカナタの方には私を観察する余裕がある。なんだか少しだけずるいと思った。

「はは。いや、いいことだから、大丈夫だよ。先入観がないからこそ、感じやすいんだろうね。うん、とにかくまず、乳首でイってみようね、ほら」
チロチロチロチロ……♡
「〜〜〜〜っっはうぅっ」
カナタの舌も、指も、止まらない。からくり人形のように、ずっと同じ間隔で動き続ける。優しく、くすぐったいぐらいの摩擦。私が一番好きなリズム。私が一番好きな、刺激。
「好き、それ好きっ、ずっとしてるとっっ、なんかっ、子宮から、あがってくるっ……、きゅんきゅんするのがっ、止まらないっ……！！」
カナタを押しのけそうな勢いで、背中がビクンビクンと反ってしまう。カナタの力が存外強いので、辛うじて私はソファに縫い留められている。
「ピンクちゃん、子宮じゃなくて、『おまんこ』って言うといいよ。そしたらもっとエッチな感じがして、感じやすくなるよ」

「？　おま……んこ……？」
「そ、きゅんきゅんしてるの、おまんこでしょ？」
「うんっ、乳首触られてっ、おまんこきゅんきゅんしてるぅっ、……きもちいいッッ、乳首とおまんこっ、きもちいぃっ……カナタっ、もっとっ、……ずっとそれしてっ、止めないでくれっ……！」
「……ははっ、ピンクちゃんってば、すごいえっちだ……」
チロチロチロチロ……♡こすこすこすこすこす♡チロチロチロ♡
「あっ、あっ、イ……『イク』っ！　……〜〜〜〜っナタっ、っば、爆発しそうな感じがするぅぅっ……！」
カナタは相槌を打たない代わりに私の乳首を舐め続け、そしてもう片方も擦り続けた。
チロチロチロ♡こすこすこすこす……♡
ぷっくりした乳首が、カナタの舌と指に可愛がられている。愛(め)でられてい

る――そう、つまり、愛されている。
そうだ、この行為は〝愛〟なのだ。私はやっと、理解した。一定の間隔で触り続けるなんて、大変な労力がかかる。それでもし続けてくれるということは、この行為が愛でなかったらなんだろう。
私は、カナタの言った「大事な人とする行為」という意味をようやく少しだけ理解しつつあった。
「あっ、好きっ、カナタっ、好きぃっ……、きもちいぃっ、……ずっと、舌が動いてっ、……も……――イクっ、イクぅぅっ……！」
絶えず疼いていたことにより子宮の中に蓄積されていたエネルギーが、とうとう臨界点を超え、外に溢れ出す。背は反り、腰は陸に打ち上げられた魚のようにビクンッと痙攣した。
「～～～～～～～～ッッ……！！」
カナタの言う通り、頭は真っ白になっていた。快楽物質が全身を駆け抜け、

まるで雷に打たれたような衝撃であった。
「あ……、あ、……ああ……っ」
瞬間、放心する。一切何も、体に力が入らなくなる。『イク』の最中との落差がすごい。
「ピンクちゃんすごい。ちゃんとイケたね、ふふ、お利口さんだったね」
カナタはまだ触れるか触れないかのような摩擦で私の乳首に触れていた。
「あ、」
そのおかげで、私の子宮内にまだ残っていたエネルギーが再び溢れ出し、二度目の『イク』がやってくる。
「あ、またっ、来るぅぅっ……、また、……『イク』の、来るぅっ……！　――ああああああ、ああああああ、……～～～～～～～っっ！！」
波が打ち寄せるように下から快楽がこみ上げてきて、ビクウぅぅッ、と痙攣する。やはり頭が真っ白になって、全身が蕩けた。

「おお、しかも連続してイっちゃった……」
カナタが感心したように吐息を漏らす。
「すごい、ピンクちゃん、すごいえっち……。ほんとに敏感なんだね、……もう、こんなの見せられたら、僕……」
「……はあ……、……カナタ……」
私はすっかり脱力し、ソファにぐったり凭れかかった。
「……よしよし」
カナタが頭を撫でてくれる。けれど、微かに息が弾んでいて、顔は赤いし、余裕がないようにも見えた。カナタの言う通り、私は『イク』を二回経験し、束の間の充足感に浸っていた。けれど、カナタは何も爆発させていないのだから、未だ〝自分が自分でないような〟悶々とした感じを抱えているのだろう。
「カナタ……カナタは『イク』をしないのか……？」

||||||||
中略
||||||||

「カナタじゃなきゃ、嫌だった。カナタに触られたいと思った。私はあのとき、カナタがいいと思ったんだ。乳首に触れるのも、割れ目に触れるのも、カナタがいい、って……、うわっ？！」

言い終えない内にカナタが覆いかぶさってきて、私の胸をまさぐり始める。あっという間に片方の手が服の下に潜り込んできて、左の乳首を摘まれる。

「もう絶対に他の男には触らせないっ」

ぎゅっと摘まみ上げられ、かと思えばすぐに離され、先端をくりくりと優しく擦られる。

「んっ、そう、だ……、っこれ……カナタなら……嫌じゃない……っ」

「……ックソ！　……ほんとはここに……ピンクちゃんを、ずっと閉じ込めてたい……」

「いい、カナタが望むなら、私は、それでも」

「っ！」

カナタは息を呑んだだけで、それ以上は何も言わなかった。
服がまくり上げられ、もう片方の乳首も、ちゅくっ、と吸い上げられる。
ちゅくっ♡チロチロチロチロ♡ちゅぱぁ……っ♡
「あ、あっ、カナタ……っ」
瞬く間に、内側から熱が溢れてくる。頭にはカーッと血が昇り、背や肩にはしっとりと汗が滲み、下腹部からはとろとろ……♡と液が零れだす。
「っそれ好きぃ……っ、きもち、いいっ……、っ、さわるのっ……、好きっ」
たまらずカナタの背中にしがみついた。
「ピンクちゃんがこんな風になるの、……僕だけ？」
くりくりくりくり……♡カナタの指が、左の乳首を擦り続ける。
ちゅくちゅくちゅくちゅく……♡カナタの舌が、右の乳首を舐め上げる。
「あっ、ちくびきもちいいっ、どっちも、いいぃっ、あ、あ、……おかしくなるぅっ……！」

前そうなったように、下腹部に快楽エネルギーが溜まっていく。カナタから与えられる刺激が増える度、子宮がもどかしくなって勝手に腰がくねくね動き出す。

「ピンクちゃん、ねえ、僕の話ちゃんと聞いてるの？」

くりくりくりくりくりくりくりくりくりっ……♡

舌と指の動きが、いっそう早くなっていく。

「〜〜〜〜っ、カナタだけだっ、だからっ、……あっ、……も……、――おまんこもっ、……さわってぇえっ」

間髪入れずカナタのもう片方の手がウエストゴムを引っ張り、私の下着の中に入ってきた。見事と言っていい手際の良さで下生えを超え、割れ目の合間に指先が埋め込まれていく。

「っっ？！　あ……っ？？」

「……すご、……濡れてる……ぐしょぐしょ……」

カナタが感心したように息を零した。が、私はあまりの衝撃に言葉を失っていた。粘膜を直接触られるのは言うまでもなくこれが人生で初めてだが、びらびらを開かれ、その奥の小さな入り口に他人の指が触れるのは、信じられないような快感だった。

「なにっ、あ……っ、待っ……！」

膣穴に謎の液が溜まっていて、それをカナタが指に塗りつけているのだろう、ちゅくちゅくと水音が立つ。

「やぁっ、なっ、……あ、あ……っ」

「っ、我慢するつもりだったのに……クソ……っ」

そのとき、膣の入り口をぬるぬる撫でていたカナタの指が、少し上の方へと移動した。

ちょうど割れ目が始まる上部に小さな突起が付いていて、カナタの指がぬるる…♡とその突起にトロ液を塗り付ける。次に、くりゅくりゅ…♡とそこ

をゆっくり摩擦し始めると、全身が溶けて弾けるような感覚に襲われた。
「〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰ッッッ♡♡♡」
たちまち、尾てい骨から脳天にかけて静電気が駆け上ってくるような快感が突き抜けていく。
「っ？　なにッ、……そこっ、触られるとっ、……すごっっ……♡……〰〰〰〰っっ頭っ……、おかしッ……♡」
「――ここ、クリトリスって言うんだよ、分かる？　勃起してるね。ぷっくり、パンパンになってる」
カナタの声は、トーンが落ち、そして掠れていた。けれど、クリトリスなる器官を弄るその指の動きは全く衰える気配がない。
「っ、くりと、りす……っ？♡　はあっ♡そこっ♡さわったらなんかぁぁっっっ♡♡♡」
「はは。いっぱいえっちな声出ちゃった。……なんか、どうなるの？」

カナタが醸し出す捕食者のような雰囲気が、ますます強くなっていく。
「ッわかんなっ♡だってこんなっっ、はじめてっ♡」
「そっか、分かんないか……。じゃ、もっと擦ってあげようね」
「っっひゃんっ♡♡……～～っっなんかっ♡いっぱっ、っきもち、い、のが、っっ……～～あがってくるぅぅぅッッッ♡♡」
くりゅくりゅくりゅくりゅっ♡……――くりくりくりくりくりくりくりくりくりくりくりっ……♡
「あ、ああっっ……♡♡」
私から溢れ出た液で濡れているせいで、そこはよく滑る。すなわち、摩擦が極度に少ない為、カナタの指もよく動く。
くりゅくりゅくりゅくりゅんっ♡…ちゅくくくくくっっ♡――――くりくりゅくりくりゅっ――ちゅくんくちゅんくりゅくりゅりゅッ……♡♡
「ひぁァッ♡あッ♡……～～クリトッ、～～っっしゅごいぃっ♡腰っ、うご

＝＝＝＝＝＝＝＝中略＝＝＝＝＝＝＝＝

「あんっ♡」
かと思うと、今度は左側の乳首を布越しにじゅぶっ♡と舐められる。
じゅぼじゅぼッ♡……くにくに……♡ふにふにふにふに……ッ♡
「！　ひぅんっ♡　んあっ……♡ああ……♡」
そして同時に、さっきまで舐められていた右側も指先でカリカリ♡カリカリ♡と擦られる。
カリカリっ♡カリカリカリカリッ……♡こちらは右の乳首。
じゅぶじゅぶっ♡くにくにくにくにっ……♡こっちは左の乳首。
「いぁァっ……♡ちくびっ、同時にじゅぶじゅぶカリカリされて……っ♡きもっ、ち、いいッ♡いっぱいきもちよくて、頭、とろけるぅぅっ……♡」
動いたらカナタが触りづらいだろうと思うけれど、あまりの快感に背中や腰が勝手に動いてしまう。
「あんっ♡んん……っ♡やっ、腰がとまらなっ……♡」

時折、つねられたり、引っ張られたりすると、それに合わせて大きな声も出てしまう。

カリっ♡ぎゅうぅ……っ♡

「！！　ひゃうッッ♡♡あっ♡あぁッッ♡」

そのまましばらく、ぎゅうううぅ、と引っ張られる。

「ん〝んんんんッッッ♡」

パッと手を離されると、ハッ、と安堵の息が漏れる。

「っハァ、っ♡」

しかし、間髪入れず今度はソフトタッチで両胸をくりくりくりくり♡と高速で擦られる。

「〜〜〜〜〜〜っっあぁぁあ〝あああああ♡♡」

こうされるともう、訳が分からないほど感じてしまった。

くりくりくりくりくり♡くりくりくりくりっ……♡

「あぁあああああッ♡カナタッッッ♡いあ〝あああ〝あああああ♡んああ〝ああああッッ♡」
「ピンクちゃん、すんごい声が、出てる……♡」
「だってっ♡カナタがぁっ……♡」
「ちくび、そんなに気持ちい？」
私はカナタの問いに必死にコクコクと頷きながら、「きもちいっ♡頭がおかしくなるぐらいっ、きもちいぃッ♡」と答えた。
「はは」
カナタは捕食者の顔で笑い、更にくりくりくりくり♡と指と舌を動かし続ける。
「あ〝あッ♡ッ〜〜〜〜〜、そ、んなッ……、続けたらあァっ……♡♡」
子宮がこれ以上ないぐらい、きゅんきゅんと疼く。そこに蓄積されたエネルギーが、マグマのように熱を持ち、だんだん爆発の兆しを見せ始める。

「もっ、……〜〜〜っ、もッ、……イク……ッ♡♡」
「いっへいいほ（イッていいよ）♡」
カナタは追い打ちをかけるように指と舌を動かし続ける。
――くりくりくりくりくりくりくりくりくりくりくりくりくり――……♡♡
「ハッ、……いくぅッッッ♡　……あ、っっ〜〜もおぉぉーー、……イクイクイクイクイクぅぅぅ……ッッッッ♡」
私は目をぎゅっと瞑り、M字開脚の下半身をビクビクッと痙攣させながら『イク』を迎えた。
「……あ……、……あぁ……、はぁ……♡」
快感のピークが過ぎた後は、反動でため息が零れた。全身から力が抜け、ベッドにクタぁ、と四肢の全てを預ける。
「ちくびでイケたね♡いい子だ♡」
と、カナタがゴロンと隣に寝ころび、前もそうしたように、私の頭を撫でて

＝＝＝＝＝＝中略＝＝＝＝＝＝

そしてとうとう、ツプ……と、カナタの指がゆっくりゆっくり、入ってくる。
「んう……っ」
初めての異物感に、さすがに眉を寄せてしまった。けれど一方で、浸食される悦びで背中がゾクゾク甘く震えた。ああ、カナタの指だ――！
「――苦しくない？」
カナタの、フ、フ、という吐息が私の胸元に落ちてくる。
「大丈夫だ」
「……待ってて、気持ちいいとこがある筈だから」
この辺かな、と言いながら、カナタが中で指を動かし始める。
「……っん♡」
指を上に曲げて擦られると、子宮がずん♡と重く疼くような感じがした。
「！　カナタッ……♡」

「……ここ、みたいだね」
カナタが息を呑む。その部分を集中的にぐりんぐりんと突かれる。
「……――あっ、……なんっか……そこっ……♡」
「ここだね？　ピンクちゃんはここが気持ちいいんだね？」
「ンッ、ん……っ！　そ、っこ……ッ、あ……ずんってくるッ……♡」
「ここはね、Gスポットって言うんだよ」
ぐりんぐりんぐりんぐりんっ……♡
「あ、っん、……じーすぽっと……？♡」
カナタの指の動きに合わせて、凄まじい勢いで子宮が収縮する。
「そう、ここが気持ちいいってしっかり体に覚えさせようね。あ、一緒にクリトリスも触ってみようね」
そう言って、内側からGスポットをぐりぐりされている状態で、外側の小さな突起も円を描くようにぬるぬると指で刺激される。

「！！！っっ」
瞬間、あまりの快感に腰が跳ね、カナタが「こら」と笑った。
「そんなに動いたら、ちゃんと触れないって」
「～～～～ッッ、だってっ、それ、それっ、……――あああ゛あああぁッ♡」
下半身は勝手にガニ股になって、膝や足の爪先に驚くほど力がこもる。
「良かった、ナカとクリちゃん一緒に弄るのそんな気持ちよくて……♡」
くりゅくりゅくりゅくりゅっ……♡
クリトリスを裏筋から丁寧に磨かれながら、中のGスポットをぐりんぐりん刺激される。
「～～～～っ、カナタッ、あッ♡それっ、それしたらぁっ……――すぐっ、すぐ……『イク』がくるっ、もッ……――――♡」
疲れを知らないカナタの指が、私のクリトリスを無限に磨き続ける。くりゅくりゅくりゅくりゅくりゅくりゅくりゅくりゅ――――♡

「あっ♡もっ、……もっ、だめっ……♡……――～～～～～～っ、カナタあッッ……♡」
「ふふ、それでいいんだよ、ピンクちゃん。とりあえず一回イっとこ？♡」
ズン、と重い快感と、ビリリッ、と突き抜けるような快感が一気にやってくる。私はこれ以上なくガニ股をビクビク痙攣させながら、『イク』に向かっていった。
「――イクっ……！　いく……、いくいくっ、……――――イクイクイクイクうううッッ♡」
あっ、と甲高い声が漏れる。
快感が弾けたその瞬間、同時に膣からプシィッ、と大量の液が溢れた。
「？　っなに……っ？」
最初、あまりに気持ち良くておしっこを漏らしたのかと思った。そのぐらい、勢いよく溢れたのだった。私の意思に反して一定時間、それはシャアアア

続きは製品版でお楽しみください